

世界学生選手権（WUC Orienteering 2022） 出場報告

小牧弘季

筑波大学 2017 年度入学

筑波大学大学院

1. 大会の位置づけ

世界選手権（WOC）の出場を何度か経験した私にとって、国際レースはすでに「体験しに行く場」ではなくなっていた。WOC よりレベルが下がる WUCO であればこれまで以上の結果を残せると考え、リザルトに対してシビアに臨もうと考えていた。大学院生で日本選手権も何度も取っているという立場で、ある意味出場枠を「奪っている」ようにも思え、少なくとも日本チーム史上最高の順位を取りたいと思っていた。そして来年のフォレスト WOC（スイス）に向けた良い試金石であり、トレーニングにもなると位置付けた。

2. 目標

個人戦：30 位以上

スプリントリレー：トップ+1：30（チーム目標は一人当たり+2分）

フォレストリレー：トップ+5：00

と、口では言いつつ、実は「もっと夢のある順位がとれないものか？いけるんじゃないの？」と考えていた。

3. 取り組み

2022 年は[スプリント世界選手権への取り組み](#)を優先させていたため、フォレストの練習は不十分だった。フォレストの練習不足で帰国直後はひどいありさまだった…。7 月頭に帰国後は、フォレストの練習を中心に行った。特に JOA 強化委員会や YMOE 社の協力により、望郷の森や八ヶ岳でのトレーニングが実現できたことはありがたかった。レースへの出場はなかったが、1 か月でいくらか取り戻すことができたと思う。スイスにはチームより一足先に入り、WOC 近隣の視察もかねてアルパイントレインで練習した。

地図読み会をチームに呼び掛けて 1 回行った。

4. トレーニングキャンプ

フォレストはロング・リレータイプとミドルタイプの両方入ったが、どちらも日本の感覚で対応可能だと感じた。特にロング・リレータイプのトレインは森の雰囲気は暗く、地面もふかふかしていて非常に日本に似ていた（椈の湖に近いと感じた）。藪が日本と違って密生した幼木であり、旧図を見ると多く点在していたので対応が必要

に思えた。具体的には遠くからまとまりをとらえること、アタックの際には藪の形を意識すること、藪の中は視界が非常に悪く方向を確認して切ること、などが大事だと思った。

スプリントの練習もしたが、デンマークほど特徴的な街の形ではなく、体を動かして動作を確認する程度の認識だった。対策地図を用いて現地への対策に時間を使った。ただ、練習時点ではミスが多く不安を抱えてしまった。

5. レースの振り返り

● スプリント @Biel/Bienne

順位：37位 (12:55, +1:25) 巡航速度：110.8 ミス率：3.5%

タイム/コース距離：3:48/km

コンディションに不安を抱えた中でのスタートとなった。コースは予想以上にシンプルで、学校や公園、旧市街地での回しをロングレグでつなげる形式だった。(画像左)



事前の予想もあり、ルートチョイスミスはほぼなかった。ナビゲーションによるロスもほとんどなく、この辺りは世界選手権への取り組みで成長した点だろう。多くの選手が失敗した地図2枚目の切り替えもスムーズに行うことができ、持ち味?であるレース中の落ち着きを発揮できたと思う。

一方で後半の回し(画像左)に入るとペースが落ちてしまい、苦しいレースになってしまった。そこで順位も5つほど落としてしまい、残念。コンディションが良ければ30位以内になることは可能だったと思う。

- ロングディスタンス

順位：54位 (1:40:08, +21:25) 巡航速度：117 ミス率：13.9%
タイム/コース距離：7:09/km

△→1で5-6分のミスをしてしまい、こうなると順位を狙うレースとしては早くも終戦。それでも長いレース、なんとか盛り返そうとペースを上げて走った。藪への対処がやはり子のトレインのカギだったと思う。対応してくるとミスはほぼなく、中盤以降は後ろから来た August Mollen 選手 (SWE) と常に競り合いながら走ることができ、最終的に54位という結果になった。

狙っていたレースだけに本当にもったいないことをしてしまったが、大会前にロングのレース経験がほぼなかったことも影響しているかもしれない。また、ロングのペースが自分の中で確立していないことも課題であったと思う。

途中で見たスイス人選手のスピードは衝撃的だった。この長いレースで我々が行う短いファシタくらいの速さで森を走っていた。

- スプリントリレー @Langenthal

順位：12位 (13:33, +1:24) タイム/コース距離：3:34/km
チーム順位：10位 (+6:08)

まずは、右の写真を見ていただきたい。国際大会で、チーム全員、ここまでレース後に充実した表情を浮かべていることはなかなかないと思う。そのくらい、結果も内容も素晴らしいレースだった。

加えてこのリレーには因縁があって、1か月前、世界選手権のチームとほとんど一緒（伊藤樹選手→朝間だけ）だった。そして伊藤樹選手はオフィシャルとしてチームに帯同していた。世界選手権のリレーでは私のコントロール飛ばしでいいパフォーマンスを示したチームを失格にしてしまい、申し訳なさとチームでのリベンジを期する思いがあった。コンディションが万全でなかったこともあり出走を迷ったが、最後は走らせてもらうことに決めた。





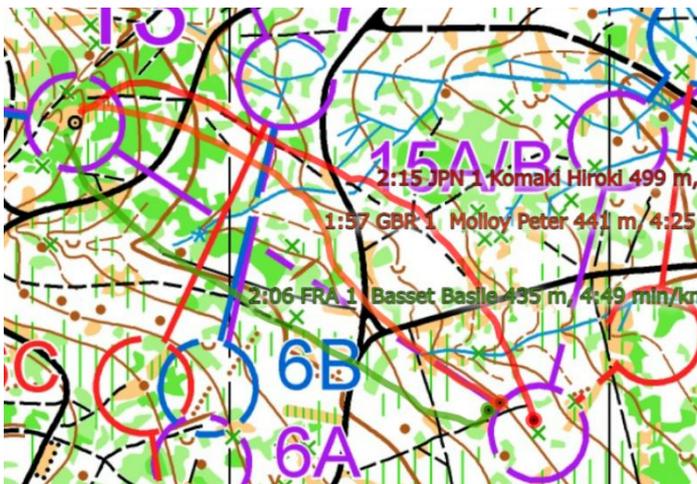
レースは1走松本がさすがの走りを見せ、6位でチェンジオーバー。前のランナーだけでなく、同世代屈指のランナーが後ろからも追いかけてくる今までにない状況。集団に食らいつきつつも、動きをみながらいいルートチョイスを重ねていった(左画像)。2周目ではさすがに離されてしまったが、国際大会でベストともいえる走りをする事ができた。

その後朝間、伊部と素晴らしい走りをつなぎ、順位をあげてなんと10位！でフィニッシュ。今までの苦しい国際大会が嘘のような、夢の順位だった。

● リレー

順位：6位 (42:23, +1:55) タイム/コース距離：5:58/km
 チーム順位：13位 (+25:34)

1走を担当した。1度ロングでは入ったトレインのため、対応はスムーズ。見通しは悪かったが、ナビゲーションしながらほかの選手を見る余裕があった。藪の中の下りで何度も離されそうになったが、道や見通しのいい場所に出るまでなんとか食らいつき、余裕が出たところで追いついていく流れ。中盤以降は明確に集団になったが、そういう時こそ自分のペースを崩さないように気を付けた。ルートチョイスもなるべく自分で行った(下画像)。その結果、集団のトップに出ることもあったが落ち着いてこなせていたと思う。さすがにあまり前に出すぎないように、ぬかすなら抜かしてくれと思っていた。



最後難しいエリアで少しロスをしたが、結果的には6位でチェンジオーバー。できすぎの結果にびっくりしてしまった。何よりうれしかったのはそのいい流れを本庄、平岡が引き継ぎ、しまったレースをしてくれたこと。13位でフィニッシュして、世界と戦えてい

たという感覚をチームでつかむことができたのではないか。

6. 総括

個人戦の目標の達成はできずとても残念だったが、リレーで個人としてもチームとしてもいいパフォーマンスを示せたことが本当にうれしく、その点は満足している。「夢のある」順位をとるんだという“裏目標”も少しは達成できたのかもしれない。また、ほかの国の選手が「早かったね」「印象的だった!」とわざわざ声をかけてくれたのもとても嬉しく、同年代の選手が集まる WUCO の素晴らしさを感じることができた。世界を広げることができたと思う。

一方で、直視しなければならない現実もある。ミス率や走行速度を見ると、スプリントのパフォーマンスは「日本と同じことができるようになった」だけでも言える。技術的には閾値に達しており、これ以上上を目指すのであれば走力の底上げは避けては通れないし、それを行わない以上日々レベルアップする世界のシーンでは戦えない。フォレストではリレーの結果はよかったが、なぜ個人戦ではその走りができないのかという疑問が浮かぶ。そもそもの森を走る力や、ナビゲーションの練度・経験値の差はあまりに大きく、一人で走ると如実に表れるのだと思う。

この辺りを細かく分析し、今後のトレーニングにつなげたい。

7. 提言

- スプリントの強化・普及は継続を

WOC2022 のスプリントリレーのメンバーは全員インカレスプリントチャンピオンである。折しもインカレスプリントの今後についての議論が行われているが、インカレスプリントがもたらしたものの一つが若手のスプリント競技力の大幅向上だと考えている。今回の結果が示すように、スプリントリレーは今後日本の得意種目になるポテンシャルさえ秘めていると思う。それをぜひ認識したうえで議論していただきたい。

- 強化・派遣の位置づけを

JWOC や WOC と異なり学生選手権の遠征の主体は学連になる。それもあがり、学生選手権の目標や位置づけは他の大会と異なり明確に示されていないように感じる。それによってチームの選考方針やトレーニング機会（学連合宿など）の行い方も変わってくると思う。私自身も日本にとってこの大会の位置づけがどうあるべきか考え、議論したいと思っている。

- 次はあなただ

学生選手権に出るチャンスは学生であればだれにでもある。2年間の準備期間は学生にとっては十分な成長時間だと思う。今はそのレベルにないと感じていても、ぜひ次の学生選手権を目指してほしい。多くの選手が、インカレ以外の場所でも学生の熱い戦いや切磋琢磨をすることは日本のレベルアップにもつながる。ぜひ夢をもって取り組んでほしい。

8. 最後に

今回の遠征ではオリエンテーリングにかかわる多くの方にお世話になりました。恵まれた関係性の中で競技ができていたことを改めて感じました。この場で感謝を申し上げます。

そしてチームメイトとオフィシャルにも、心からありがとうと言いたいです。選手の最年長として、それにしても頼りなかつたと思いますが、支えていただきありがとうございました。皆さんとチームメイトだったことを嬉しく、誇りに思います。忘れられない遠征になりました。